

re:死んだら始まった!?喰種の異世界生活

リョー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最強喰種であり最強捜査官である青年が目覚めたら見知らぬ土地に!?

目次

起き上がり

序章、紹介

死んだと思ったら生きて

呪いと守りと

恋と悩み

拒絶されて願われて

化物だって心はある。嬉しいことを言われたら嬉しい。

暴走

執事兼騎士

客人

1

3

10

17

21

26

31

36

41

起き上がり 序章、紹介

「ああああーっっ！いいいいっっったいい!!」

頭の中が掻き回されるような痛み悶える。あらゆる痛みを体感し慣れてきた俺にとって痛みに悶えるというのは久しぶりの出来事だった。

痛みは肩甲骨、肩、腰、尾てい骨と、頭とその他の部分も蝕んだ。

バキバキバキツとでまるで硬い鉄が折れ曲がる様な嫌な音が体の中に響く。音に反応するように俺の理性は崩れた。

そして闇の中から足音が聞こえた。

それは俺の事を手塩にかけて育ててくれた上^{両親}司。

俺と同じ白い髪の男性はいつになく哀しそうな顔で、金髪の女性は頬を濡らして、二人揃って言った。

「さようなら。ありがとう」と。

其処からは覚えていなかった。雨に濡れて冷たくも暖かな刃が俺の体を貫いたこと以外は。

生まれ変わったら人間に成ろう。

彼女も出来るといいな。

そうだ、喰種捜査官に成ろう。

また真戸さんと有馬さんにもう一度会おうんだ。

その時は二人とも年老いてるかな。

フッフッフッフハハハ、、僕は幸せだったんだな。喰^{悪の象徴}種だったのに。

フッフッフッフハハハ、、こんなに幸せで良かったのかな。喰^{悪の象徴}種だったのに。

哀しく今にも消えそうな笑い声と泣く声は暗い東京の街に木霊した。

「む。なんだ？あれは」

石畳の上にそれは横たわっていた。

見つけた深緑の髪の女性はゆっくりと近付く。そして驚いた。そこにいたのは血塗れの青年。

体には不思議な武器が刺さっていて爛々と赤黒い灯を放っている。そして体中が血で塗れが傷口さえも分からないほど傷ついている。

取り敢えず邸に運んで治療してもらおう。そう考

え血塗れの青年の背中に手を回し俗に言うお姫様抱っこをしようとし力をいれるが、思っていたよりもずつと軽い体に再度驚いた。

「これは不味いな」

185cm位身長があるのに女性一人で、しかも楽々と持ててしまいう程に血が流れて、衰弱しきっているのだろう。

女性もといクルシユ・カルステンは急いで青年を邸へと運んだ。

主人公紹介

24区所属 鬼神 s s s +レート

0番隊所属 師走しわす 千景特等捜査官ちかげ 19歳

〈rcitype〉

羽赫、甲赫、鱗赫、尾赫

〈クインケ〉

aria 羽赫 s s +レート 形状：銃剣付き対物ライフル

g—arms 甲赫 s s +レート 形状：刀

like：真戸、有馬、あんでいくのコーヒー、読書

hate：酔った篠原特等の絡み、暑苦しい

〈外見〉

白髪白眼、高身長、端正な顔立ち

〈性格〉

冷静、無口（仲の良い人には自分から話しかけたり冗談を言ったりする）

死んだと思ったら生きて

「……？」

見知らぬ天井。

何処だろう。ここは。

もしかして此処が天国なのだろうか。しかしそれにしても豪邸っ
ていうだけだ。

起きてから疑問符しか頭に浮んでいない。

あの時確かに死んだ筈だ。考え込んでる俺を猫耳の女の子が覗き
込んだ。

「起きたみたいだねー。気分はどうかにや？」

猫耳。見間違いだろうか。目をゴシゴシ擦ってもう一度見るが猫
耳は消えない。

「私が可愛すぎて信じられないのかな？？」

女の子はそう言い俺に絡んでくる。

「此処は何処でしょうか？」

そう言いながら体を起こそうとするが全身に激痛が走る。

「ダメダメ。まだ起きちゃ。此処はルグニカだけど？どうしたの？海
馬やられちゃったのかな？」

ああ。理解した。異世界転生ってヤツかな？前に才子とトーマに
薦められて（押し付けられて）読んだラノベって本に書いてあった。

これまで s s s + レート喰種になって、はたまた特等捜査官になっ
て、暴走して殺されて、って感じで波乱万丈の連続だったけどして流
石に異世界転生はない。流石に酷い。流石に。

「正直に言いましよう。俺は一度、他の世界で死にました。そして目
覚めたら此処に居ました。状況が掴めません。」

すると女の子はちよつと待っててね、といい部屋を出た。改めて大
きい部屋だなあといいながら部屋を見渡す。そういえば、フレームは
どうなったんだらう。暴走したときに聞こえた音はフレームが折れ
る音だらう。

そしてベッドの横の机を見た。フレームを発見した。

机の上にはクインケ鋼で出来た鉄屑が無造作に置かれてた。さらにクインケが2つ立て掛けてあった。どちらとも俺の物だ。クインケをなくしたのかと思ってたが、俺の相棒があつて良かった。

何しろこのクインケは俺の赫包から出来ている。だから馴染む。そうしている内に「入るよ」と言うこえが聞こえた。

女の子は深緑の髪の美女を連れてきた。

「私の名はクルシュ・カルステンだ。まず貴方の名を教えてほしい」
そう言えば、その女の子にも名乗り忘れていた。

「俺はチカゲ・シワスです。ところで今日って何月何日でしょうか。というか俺は何故此処にいるんでしょうか」

そう言うとき女の子が答えた。

「私のことはフェリスって呼んでね。フェリちゃんでも良いよ。えーとね今日は12月18日だよ。そして君は血塗れで倒れてた所をクルシュ様が見つけて此処に搬送されたんだよ。というか君は違う世界で死んだ、とか言っていたよね。それってどういうこと？」

フェリスに続いてクルシュが口を開いた。

「私からも質問が2つある。君は何だ？そしてその武器と鉄屑は何だ？」

「何、とは。まるで俺が人じゃないような言い方ですね。当たり前ですけど」

クルシュは一瞬だけ目を見開いたが直ぐに元の顔に戻った。

「まずフェリスさんの質問に答えさせて頂きます。その通りです。俺は一度他の世界で死んで居ますよ」

フェリスさんとクルシュさんが俺に聞こえないように話している。会話は筒抜けだが。

「次にクルシュさんの質問に答えさせて頂きます。俺は人ではありません。群衆に紛れて人を喰らう悪鬼、喰種です。」

「喰種？」

フェリスが首を傾げる。成る程、この世界に俺以外に喰種は居ないみたいだ。

「喰種とは、人を食べることでしか生きていくことができない。人と

コーヒーしか口に出来ない生物です。人に良く似ていますが幾つか違う点があります。例えば、これですね」

閉じていた片眼を開くと今まで雪のような色だった眼は赤黒くなっていた。俺は天然の隻眼の喰種だ。片眼を見てフェリスとクルシユは驚き、そして畏怖を顔に浮かべた。

「そして、その武器と鉄屑についてですが鉄屑については僕の力を制御していたものです。そしてその武器ですが、取って頂けると助かります」

そう言うとクルシユが取って、渡した。しかし俺から距離を取ったのは警戒の証だろう。

「重いなその武器」

「そうですね。」

今までどつちとも片手で使っていたが。g | a r m s 正式名称白幻の方を持つ。

「これは刀ですね。ただ仕掛けがありますがそれは又の機会に」

次にa r i aの方を持ち、話し出す。

「これは銃というものです」

窓を開けてa r i aのボルトを引いて戻す。

そして空へとa r i aを向けた。クルシユ達が何をするのかと見ている。

引き金を引くと独特な銃声が鳴り、何もない空へ銃弾は飛んでいった。

a r i aはよくQバレットに間違えられるがれつきとしたクインケだ。

しかも威力は望元のハイアーマインドを越すだろう。

過去に梟の腕を一本吹き飛ばした。

ボルトを引くと空葉莢が廃莢口から飛び出した。そして2つの武器をアタツシユケースへとしまった。

「まあ。こんな武器です。」

クルシユ達は苦笑いした。そしてクルシユさんは言った。

「時にシワス君、私の執事をやる気はないか？」

「私の執事になれば給料もだそう。食事も毎日だす。取り敢えず食糧として私の血をあげよう。他にも損は無いようにしよう。だから私の執事になってくれないか」

クルシユはそう言い頭を下げた。願ったり叶ったりだ。仕事とかお金はどうしようかと思っていた。

「頭をあげてください。執事になります」

そう答えるとクルシユは微笑んだ。何故だろうか。その笑顔は脳裏に焼き付き、消えなかった。

「というか何故そこまでして俺を？」

そこだけが気掛かりだった。何故そこまでして俺を執事にしたいのか。初対面でもあるし、なにより人を喰う悪鬼の俺を。

「単純だ。お前が欲しいし、お前に興味がわいたからだ。悪人にも見えない。性格は問題ないし仕事もできそうだ。それに美男子は歓迎だ。悪鬼だの人喰いだのは正直さっぱりだ」

「あともう一つ。君は殺したい相手に自ら殺人鬼を名乗るやつを見たことあるだろうか。本当に喰いたい人間の前で、自分は人喰いだなんて言わないだろう。そういうことだ」

その後クルシユはナイフで指を切り、血を採った後俺に渡した。契約の証だ、と言って。

クルシユさんの血を飲んで身体が回復したから庭に来ていた。

庭って言うより庭園だが。

身体の状態を確認するためだ。まず羽赫を出す。フレイム無しの赫子は捜査官時代よりずっと大きい。

違和感をおぼえるが、その違和感も他の赫子を出している内に修正されていった。

次にクインケを出す。動作確認をするが異常はない。

身体を動かすがいつも通りだ。体力は相変わらず人の7倍といったところだろう。

そうして素振りをしていたら一人の男が来た。

「貴方がこれから執事になる方でしょうか」

その男は強者のオーラを放っている。これほど大きな場所だとやはり腕の立つ護衛は必要なのだろう。

「はい。そうです。俺はチカゲ・シワスと申します。以後お見知りおきを。」

「申し遅れました。私はヴィルヘルム・ヴァン・アストレアと申します。ところでいきなりですが私と手合わせしませんか。察するに貴方は相当、いや私が見た人間のなかで一番強い。それに貴方は死地に生きる者の眼をしている」

そもそも人ではないのだが。

「そう言う貴方も強いでしょう。発せられる覇気が違いますね」

いつか感じた感覚。芳村のようだ。

「手合わせ、お願いします。それと気付いていますよ。フェリスさん」
物陰に向かって言うと言案の定フェリスが出てきた。

「凄いね。君。私の尾行を見破るにやんて。私としても気になるんだー。君の力」

「それなら丁度良いですしフェリスさんには審判をしてもらいましょうか」

「はいはい。じゃあこのコインが落ちたらスタートね。魔法は無し」

そう言ってフェリスはコインを取りだし見せる。

そしてコインが宙へ舞い、落ちて甲高い音を響かせた。

真っ先に動いたのはヴィルヘルムさんだった。

俺は避けながら動きを観察する。

得物は普通の大きさの木刀。

俺のもつ長めの木刀じゃ相性が悪い。

そして振りが速い。

操っている本人自体もの強靱なまでに鍛えられた肉体を持っている。

そして冷静。動きが速い。有馬さん程では無いが。

さらに動きが速い癖に一撃一撃に力が込もっている。

見えた弱点は、肘、膝、股関節。

そこだけ動く時にタイムラグが生まれている。

剣を振りおわった後に木刀の柄で肘を叩いて隙をつくって攻撃を入れるのが最適だ。

〈ヴィルヘルム視点〉

ヴィルヘルムは焦っていた。

自分の攻撃が涼しい顔で避けられていることに。

しかも自分の動きが分析去れていることに。

彼は時折眼を瞑ったりするけれども、そこを突いた攻撃も全て避けられた。

要するにヴィルヘルムが抱いたのはこの男には勝てないのではないかとという焦りだ。生物として狩られるのではないかとという焦りだ。

次の瞬間襲ってきたのは肘の衝撃。

やはり見抜かれていたらしい。

肘は傷めているのだ。

それにしても恐ろしい。この男は恐ろしい。

何があつてこんなに強くなったのだろうか。

多分、剣聖の能力を使ったラインハルトとでも渡り合えるのだろう。

嗚呼。恐ろしい。

〈主人公視点〉

1、2、3、今だ。

三連撃の後の隙に肘を木刀の柄で叩いた。

そして大きな衝撃に身体をのけ反らせたヴィルヘルムの腹に連撃を叩き込む。

俺は腹を押さえ込んだヴィルヘルムに剣を向けた。

「降参ですか」

そう聞くとヴィルヘルムは剣を置く。

「参りました」

勝った。良いリハビリにもなった。

俺は胸から箱を取りだし、煙草を一本取ったあと火をつける。

何故か俺だけ喰種なのに煙草は吸えるようだ。普通に美味しい。喰種だから肺だつて治る

「それでは食事会場に案内します」

ヴィルヘルムは俺が煙草が吸い終えた時にそう言った。

今日は12月18日。今日で20歳。

この世界に成人式はあるのだろうか。

元々の世界で真戸さんから隠れて煙草吸ってたのも今となっては良い思い出だ。

呪いと守りと

「、、、?」「ここは?白くて何も無い。昨日の出来事は全て夢でもしかして此処が天国なのか!?白くて何も無いから凄いとこる感凄いや!!」「やつと目が覚めたね。」声が聞こえた。その方向へと向く。そこにいたのは白い竜。馬鹿デカくて正直言うと怖い。

「俺はドラゴン。君は千景だね。」

「ああ。そうだ。お前は何だ?」鼻を前にしたときより怖い。何なんだ?コイツは。

「一言で言うとう竜だ。ただ分類としては精霊のうちに入る。」竜?精霊?俺の迎えに来たのか?でも何で神じゃないんだよ。不安になるだろ!!

「ん?君は死んだわけじゃないよ。」心の中も読めるとか、プライベートの侵害だわ。

「ねえ、君。俺と契約を結ばないかい?俺と契約を結べば君を守ろう。今君は面倒くさい呪いがかかっている。それは一生解けないだろう。」契約多いな。今度は俺が主人ってか。

「それはどんな呪いだ?」

「未来選択。自分の行動が未来に繋がる。行動によって未来が変わり、悪い選択をした場合その日の夜に予知夢をみる。予知夢は絶対であり、未来を変えることは基本出来ない。」

「まあ、自分の行動が駄目だった場合訪れるのは悲劇で、それを悲劇が起る前に知ることができるので、何も出来ない。って感じだね。」もし、悲劇で大切な誰かが死んだら、それを知っているのに自分が何も出来ないなら、、、。イカれた呪いだ。俺への罰なのだろうか。人を沢山殺した癖に違う世界で和気藹々と暮らしているこうとする俺への罰なのだろうか。

「でも基本変えられないって、例外が有るってことか?」だとしたら助かる。なんとか出来るかも知れない。

「あー、それは未来が変わるほどの問題を殺した場合と、他人、若しくは自分の大切なものを対価として払った場合。大切なものの基準に

ついでにはかかれてないね。」嫌な呪いだ。

「で、どうするの？ 契約を結ぶの？ 結んだら微精霊操れるし、全ての竜に好かれるよ？ あと俺に乗って空の旅出来るし、呪いについての知恵も貸すよ？ どうするの？」結んでデメリットはないって感じか。それに面白い奴だな。信頼も出来そうだし、一緒に居て退屈しなさそうだ。

「契約、受け入れた。」そう言うのとドランは嬉しそうに笑った。

「契約するに当たって条件を決めよう。これは主人の意見は考えずに精霊が決めるものだから文句は言わないですよ？」そう言うのと少しの間考えたあと、こつちを向いた。

「契約条件 其の壱、互いを信頼する。以上!!」いや。そんなドヤ顔でこんなこと言われても、。。。

「それじゃあ契約完了ね。起きたらまあまあ大きい宝石がての中にあると思うけどそれ、俺の寝床みたいなやつだから。売り飛ばしたり、無くしたりしないでよ。それじゃあ現実で会いましょうー。」

白い空間が遠く成っていつて、。。

「起きて!!チカゲー!!」二回目の天井、男なのに甲高い声。ああ、戻ってきたんだ。フェリスが何処か安心した様子のチカゲをみて心配している。昨日日本人の口からはつきりと男だと聞いたが女の子にしか見えない。ふと右手の中に硬い感触を感じる。見てみればそれは白く輝く宝石。これがドランの入っている宝石かあ。取り敢えず仕事をクルシユ様から聞きつつ、精霊と契約したことを報告しに行こう、。。って道がわかんねえええ!!内心おもいつきり叫ぶ。周りにひとは居ないわけ??キョロキョロと見渡してみるが誰もいない、。。ように見えた。

「どうしたの？チカゲ♪」それは駄目だ。落ちてしまう。男同性なのに。

「あ、そうだ。クルシユ様から服預かってた。執事用の服だった。」見てもればスーツだった。ヴィルヘルムさんは燕尾服だったけど燕尾服が劇的に似合わない俺はスーツに成っていた。フェリスから服を受け取ったあとベッドの周りがあるカーテンを閉めようとするがそ

れをフェリスがとめる。

「ん？どうしたの？フェリちゃんは男だよ？カーテン閉めなくてもいいよ？」ちよつ、ほんとマジで止めて。鎮まれ俺の性剣セクスカリバーアア!!!

「あ、もしかしてやらしいことを考えて股間が「あーあーあーあー」しているのかな？」良からぬ発言があったから即席テロップをいれつつカーテンを閉める。カーテンの奥から、

「クルシュ様には言わないでお願いだから安心してー」今の一言で安心出来なくなつたよ!!

そうして無事（嘘）に着替え終わってフェリスに案内されてクルシュ様の部屋へ向かう。ドランの寢床は実はネックレスになつていたらしく首から提げることにした。

「ブウツツツツ!!」クルシュ様が紅茶を吹き出す。仕事のことを詳しく聞いたところまでは良かった。駄目だったのはそのあとに言つたことだった。

「あと、竜？みたいな？精霊と契約したのですがどう致しましょう？」竜みたいな精霊といつて指すものはこの世（異世界）にただ一つらしい。精霊竜ドラン、若しくは真精霊ドラン。この精霊は世界一の力を持っているときれる精霊だ。ただ、この精霊は人を選ぶ。そして今まで選ばれた人間はいない。だから千景が初めて選ばれた人間だ。

「取り敢えず庭に行こう。解放してみてくれ直接話がしたい。」クルシュ様に着いていき庭へと向かった。

「ドラン、出てきて。」そう言うと宝石の中からドランは出てきた。いや出てくると言うよりワープ？

「千景？どうしたの？」

「俺はここの執事だから俺の主人に取り敢えず挨拶？」

「なんで疑問形？」ここまでラフな感じで最強精霊とか。精霊ってみんなこんなもんなの？」

「そうだね。だいたいこんな感じだよ。」だから心の声を読むな。プライバシーの侵害だぞ!!

「だって聞こえちゃうんだもん。」はあ。もういいよ。

「楽しそうなところ済まない。私はクルシユ・カルステンだ。千景の主人でもある。」

「あー。そう言う堅苦しいの苦手だ。ドラんだ。呼び捨てでいい。千景が下に就くと言うことは信頼して良いんだろう？」ドランの言う通りだ。基本下に就けとけと言われても相手を極めて決めると言うのが俺流だ。クルシユ様かは会って少し（2日）だが信頼出来そうだ。それに助けてもらった恩がある。

「で？俺は何をすればいいの??」ドランがそんな感じで聞いてくる。それは俺も分からずクルシユ様の方へ向く。

「ああ。済まない。ただの挨拶だ。千景、今日は仕事が終わってから街を見てくるといい。今日の仕事は掃除と昼食の料理、、嫌、人の食事食べられないのなら料理は出来ないか？」フフフツ。この俺を甘く見ないでほしい。喰種なのに料理は得意なほうなんだ。一時期あんでいくで料理人をやっていたこともあったしね。

「料理は普通に出来ますよ。」

「そうか。なら昼食も頼む。私とフェリスとヴィルヘルムの分だけだから時間はかからないと思う。あと給料は仕事が終わって街に行く前に渡そう。竜車の手配だが、」

「ああ、それならドランにのれます。空を飛ぶんで速く着けそうですし。」

「!!」クルシユはあからさまに驚いた。精霊竜に乗れるなんて。この男は何者なんだと。

そうして執事1日目スタートした。

コンコンコンと包丁がまな板に当たる音が厨房に響く。中には身長の高い白髪の男が一人だけ。

ああ。メニューは任せると言われても好みとか知らないからどうすれば良いか分からない。んー、と一人で前菜のレタスを切りながら考えていると厨房の扉のからひよこって顔が出てきた。ハイ！ヒョッコリハン!!そんな音声が似合うポーズでこちらを見ている。

「どうしたんですか？フェリスさん。」

「いや、音が聞こえたから今日のご飯が気になって、モジモジ」はあ。ほんと可愛いなこいつ。マジで男なのか？

「それが、皆様の好みが分からず何にしたら良いのか思い浮かばないんですよ。あ。フェリスさん好きな食べ物有ります？」フェリスにそう言うと、少し考えてからこちらを見ていった。

「何でもいいよ!!」その無邪気な笑顔は反則。まあそんなことは措いとして、それなら今日はパスタにしようかな。俺が一番得意なのはパスタなんだし。幸い昼食まで時間も有りそうだから本格的なのが作れる。頭の中の自作レシピを思い起こし作り始める。そんな様子をフェリスは笑みを浮かべて見ていた。

ざっと一時間後、パスタは完成し良い匂いが漂っている。出来たパスタを大きめの皿に盛り付けてクルシユとフェリスとヴィルヘルムのところへと運ぶ。

<クルシユ視点>

さて料理を任せて見たのものの出来栄えはどうだろうか。私としても興味があった。人の食べ物を一切食べられないから味見も出来ないだろうに。それにしてもさつき廊下をみたら物凄く綺麗だったし、フェリスが言うには包丁の扱いも完璧だったと言う。前菜も完璧だ。そしてこの水。我が邸で食前に水が出てくる何て合っただろうか。まるで高級レストランだ。

ん、何だ？この匂いは。凄く良い匂いだ。匂いから察するに今日の昼食はパスタだろう。興奮が止まらない。食事にここまで興奮するのは久しぶりだ。あれこれ考えているうちに三人分のパスタを器用に運ぶ彼の姿が見えた。食卓まで運び、前菜の皿を片付けつつまた厨房へと戻っていった。そして直ぐ姿がまた見えた。今度は飲み物を持って来た。透明なグラスに入られているのはアイステイラーだろう。食事の最中に紅茶を出す、と言う心遣いも良い。そして持って来た透明のポットを高くあげてまるで滝のように水を出した。成る程、水が爽やかで美味しかったのは水に柑橘類の果実等を入れているか

らか。なかなかいや、物凄く良い発想だ。水を三人分継ぎ足し終わつたあと軽く一札をし厨房へ戻っていった。さあ料理はいかに。フオークでクルクルとパスタを巻き、口へ運ぶ。ああ、何て美味しいのだろう。間違いなくこれまで食べたパスタの中で一番美味しい。人の食事が食べられないのにこれ程のものが作れるとなると、もし人の身に生まれたらどうなっていたのだろう。クルシユはまさかの超有能執事に感謝した。そして自分にしか聞こえない声で呟く。

「これは給料奮発しないとな」

<主人公視点>

パスタ、良い具合に出来たなあ。あれを自分で食べられたら良いのになあ。叶わない夢を抱きながら皿を洗う。クルシユ様やフェリスさん、ヴィルヘルムさんの笑顔を見られて良かったなあ、と思う。普段会ってまだ2日の相手には基本あまり関わらないし、興味も沸かないけれどこんな風に思うことは俺は皆のことが好きなのかもなあ。すべての皿を洗ったのを確認すると汚れている部分が無いか確認し布で拭く。皿をもともとあった場所に戻すとエプロンを洗濯籠に入れる。洗濯はヴィルヘルムさんの仕事らしい。なんかヴィルヘルムさんが洗濯している光景ってイメージしづらいけど。考え事をしているうちに自分の部屋を通り過ぎていたことに気づいて慌てて引き返す。鍵を取りだそうとポケットに手をつまむが、、、無い!!鍵が無い!!取り敢えず部屋に入って考えようと(鍵も無いのに)して扉を開けようとするのと開いた。ええー。そもそも鍵を部屋に置いて行っていて鍵は部屋にある的な。一人で焦って一人で解決した。ああ。疲れた。街にいくまえに寝よっかな。安心して部屋に入るが、そこに居たのはクルシユ様だった。

「ああ、やっと来、「ボタン!!」一回部屋を出て部屋が誰の部屋なのかを確認する。書かれていたのはこの世界で千景を表す文字だった。そしてもう一度部屋に入る。

「部屋は間違いでは無いぞ。あと鍵はしっかりかけろよ。給料を渡しに来た。あと話をしに来た。」

「そうでしたか。」返事をしながら上着を脱いでワイシャツの袖を綺麗に捲り、一番上のボタンを外す。

「まず、これが給料だ。」紙袋を受け取って机の上に置く。

「有難う御座います。ですがこんなに貰って良いのでしょうか。」見たところ沢山入っている。

「働きに応じた金額を渡している。つまりチカゲはそれ程の働きをしたということだ。」そんなにやったかなあ。まあ受け取っておこう。

「それなら有り難く頂戴します。それで話とは。」

「話の前に、敬語は使わなくて良い。フェリスに話しかけるように普通に話してくれ。」まあ本人が言うなら。

「分かりました。それで話とは？」何か変わってない気もするけど声のトーンなどは変わっている。口調は元々こんな感じだからなあ。

「チカゲは執事などの経験は有るのか？」執事と真反対の殺し合う職業をやったよ、何て言えねえ。

「いいえ、無いですよ。」

「そうか。なら大丈夫だ。街では気を付けろよ、と云うかチカゲなら返り討ちに出来るか。まあ楽しんで来いよ。フェリスが案内として着いてくらしい。私は仕事があつて行けないが楽しんで来いよ。」

それから少し経った時の事。空から叫ぶ女性の声が聞こえたららしい。

恋と悩み

不思議な男だ。第一印象はそれだけ。いきなり血塗れで倒れていた男をまともな人間だと考えること自体、無理があるだろうが。私が言っているのはそう言うことではない。私はある能力が使えた。だが彼に対してだと能力が使えなかった。私の能力とは、それは嘘を見る能力だ。だから彼が嘘をついているのかどうか分からない。それでも信頼出来ないというわけではない。私自身、信頼以上の感情を抱いているし。何故か分からないが、彼と一緒にいるとき、彼と話したとき、彼の話をしたとき胸が苦しい。同時にフェリスや他の女が彼と親しげに話しているときは胸がモヤモヤしたり違った苦しさを感ずる。この苦しさはなんだろう。いや、なんだろうと言うのが本当は気付いていたんだ。

この邸で働き始めてから2ヶ月が過ぎた。仕事はすべて覚えて最早マスターしたし、訓練も欠かさず行っている。この世界には魔獣っていうのがいていい訓練にもなる。まあ雑魚だけど。ただ、今一つだけ悩みがある。クルシユ様がおかしい。なんか避けられている気がするし、かといって他の人と話している俺に殺気を向けてみたり、まじで俺何かしたか？これまで2ヶ月の記憶を辿ったが何一つ問題は起こしていなかった。寧ろ予知夢すら見てない。まじでどういうことなんだろう。あとでフェリスにでも相談して見ようかな。朝食の皿を洗いながらそんなことを考えていた。でも食事は残さず食べるんだよなあ。嫌いな人の料理食べるか？普通。手元の皿を見てそうも考えた。

「で、悩みってなにかなー？恋の悩みかなあ〜？」今は夜、仕事を終えてちようど部屋へ帰るころにフェリスと会い、今は俺の部屋で話している。

「いあ、最近クルシユ様に避けられている気がする。クルシユ様なにか言っていた？俺なにかしたかな？クルシユ様には嫌われたくないし、なにかしたなら謝りたい。でも謎なのは俺の作った料理はしつか

り残さず食べるし、血も3日に一回提供してくれる。俺のこと嫌いな
ら普通料理も食べないし、血なんて渡さないでしょう？だから余計分
からないと言うか。あと俺の料理って美味しく出来てる？味見でき
ないから分からない。」そんな悩みについてフェリスは溜め息をはいた後二
ヤニヤしながらいった。

「なんだそんな悩みかあ。ほんとこれだから天然鈍感は。一つだけ言
うとクルシユ様はチカゲのこと嫌いだと思っただけよ。ここからは
気付いてあげて。クルシユ様の気持ちに。あとチカゲの料理は滅茶
苦茶美味しいよ。お世辞抜きで。それじゃあね。コーヒーご馳走
様。」フェリスは足早に部屋から出ていった。一人だけ残された部屋
で考える。

「クルシユ様の気持ちってなんだ？敵意？それはないか。嫌いだと思
っただけよ。好意？まさかないよな。こんな俺に
好意寄せることなんてないよな。」一人で橙色の柔らかい灯で満たさ
れた部屋の中でボソボソと独り言を言う。ああー。考えても無駄だ。
胸から黒い丈夫な紙箱を抜き、葉巻を一本取り出す。葉巻の中でもと
びきり大きいサイズのそれはそこそこ値を張った。この世界に葉巻
が有ること自体驚きだが。銀色に輝くお気に入りのシガーライター
でキャップを切り取り、お気に入りのオイルライターで炙るように火
をつける。どちらとも元の世界からたまたま持ってきたものだ。手
に馴染んだ形は異世界で不安な気持ちを安心させてくれる。吸った
煙を口からはきだす。そしてまた吸う。時を忘れてしまうよな至福
の時間にただ体を心を委ねていた。

心地よい鳥の鳴き声が聞こえて起きる。外は明るくなってカーテ
ンを開けて、眩しさに目を瞑る。歯を磨いて顔を洗い執事服に着替え
る。朝の準備が全て終わったあと引き出しから鍵を取りだし部屋を
出る。まだ皆寝てる時間だから足音に気を付けて厨房へと向かい朝
御飯を作る。もう馴れた動きで一切の無駄なく朝御飯を作り出す。
良い匂いに釣られたのかフェリスが厨房を覗いている。

「おはようございます。フェリス。」この2ヶ月でフェリスとは随分仲

良くなった。呼び捨てで呼び合う程に。

「おはよー。チカちゃん。今日の朝御飯なにー？」チカちゃんはやめてほしい。この女っぽい顔は俺のコンプレックスなんだ。

「焼きベーコンにスクランブルエッグ、パンにコーンスープです。」

「良いネー。どんな感じで作るのか見せてよー。」あれ、良いねと言う割に反応薄い!?

「てゆーか、なんで喰種なのにそんなに料理上手いの？」それは意外にも誰にも聞かれたことが無かった。

「えーと、喰種って人から追われて殺される種族だつて話しましたよね？」

「うん。」

「喰種には三つの喰種がいます。一つは人を食べると言う理由ではなく娯楽で大量に殺す喰種。まあこう言う喰種は大抵共食いもするんですが。二つ目は人を恐れて地下へ逃げる喰種。喰種は飢えに強い種族なので彼らは一ヶ月に一回程、地上に来て人を殺して食べる、若しくは自殺した人の死体を拾って食べます。三つ目は人と関わりをもち人の社会に溶け込んで生きる喰種。喫茶店を経営したりする喰種もいます。彼らは同じ喰種どうし集団を築いて暮らします。つまり、三番目の喰種は人と関わりが有るため人の真似を暮らして過ごさなければいけません。隣の人にお裾分けを貰ったとしたら料理して渡してみたり、色々な場面で料理は人の真似をするのに使えます。僕は三番目の喰種で必要だったので料理を覚えました。」

「ねえ、チカちゃんはさ、人を食べたことが有るの？」

「ありますよ。喰種だったら当たり前のことですね。まあ僕は人より共食い、則ち喰種を食べてましたが。」フェリスの顔が歪む。まあ顔を歪めるのも普通だと思うがこっちとしても生きる為だからしょうがない。

そうやってフェリスと話しているうちに朝食が出来上がる。

「出来たので席に着いてください。」フェリスにそう言うのと元気に返事をして食卓についた。手際よく料理を盛り付けていると今度はクルシユが厨房へ来る。ちょうど良い。二人だけの時に聞きたいこと

があった。

「おはようございます。クルシユ様。」

「ああ、おはよう。」

「起きたばかりの所申し訳有りませんが、クルシユ様は俺のこと嫌いでしょうか。」

「!!」一瞬慌てたクルシユ様だったが直ぐに答えた。

「嫌いじゃ、ないぞ。と言うか好き」

「??」

「ああ、何でも無い!!と言うか何故こんなことを」

「最近避けられている気がしてましたから。嫌いじゃないなら良いですけど。ああ、朝食が出来上がったので席に着いてください。」そう言うくとクルシユは食卓へ向かっていった。何故か肩を落としている気がしたが。

「ああ、変な勘違いをさせてしまった。私はチカゲが大好きだ、愛している、何て言えないよな。」乙女クルシユは何もない空間にそう呟いた。

拒絶されて願われて

ざわつく街、沢山の人、相変わらずこの雰囲気は嫌いだ。人当たりして疲れてベンチに腰掛けつつ、煙草を吸う。えっと、何を買ったんだっけ、、、

「朝食の材料と茶葉でしょ。」もう慣れきったドランのプライバシー侵害。宝石からドランは出てきた。ドランなど精霊は大きくなったり小さくなったり出来るらしい。今のドランの外見は子竜って感じた。

「チカ相当疲れているね。大丈夫？」ドランの気遣いに感謝する。

「街とか五月蠅くて人の多い場所は嫌いだ。」

「あー。チカってそういう性格だもんね。へー。人見て食べたくなったりしないの？」

「どうせ、分かっているでしょ。」滅茶苦茶お腹すいている最中に人を見るとそりやあ食べたくなる。今日は血を貰える日だ。早く帰って血を貰おう。ベンチでクルシユ様に頼まれた茶葉の存在を確認してから紙袋を持ち上げる。吸い終わった煙草を近くの吸殻入れに突っ込んで歩き出した。

「ぐあつ、やめて、くれ!!」路地裏を通って帰ろうと思つて路地裏に入ったら三人の男が一人を蹴ったり殴ったりしていた。助けに入ろうと声を掛ける。

「大丈夫ですか？」「そこまでよ。今なら許してあげる。だから盗んだものを返して!!」急に銀髪の女の子が出てきて男を殴る蹴るしていた男性3人に言う。

「私の要求は一つ。私の徽章を返して。他のものなら諦めがつくけど荒れだけは駄目なの。」男と女の子がワーワーやっていると、傍観する。やがて女の子走り出した、と思つたら振り向いて四つの氷を放った。三つは男達に一つは俺の所に飛んできた。それを手でキャッチする。

「何の真似でしょうか。いきなりただの通りすがりに攻撃するなんて、止めた方がいいですよ。」女の子にほんの少しも殺気を放ちながら

言う。そう言うと言身構えた。

「それと、その後ろの精霊さん。出来れば貴方からも自分のご主人様に忠告して欲しいですね。これ以上攻撃したら危ないよ、って言うってもらえると無駄に体力使わないで済みますから」そう言っても尚、無言の精霊に呆れて溜め息を吐いたあと、羽赫を出そうとするがドラゴンがそれを止める。そしてドラgonは宝石から普段の大きき（デカイ）でこそつと笑わないでね?と言ったあと精霊に語りかけた。

「俺は精霊竜ドラゴンだ。そちらの名を何と言う。罪なき我が主人に襲いかかった罪は大きい、だが今なら許してやろう。」銀髪の女の子はドラゴンを見て大ききと外見にビックリしている。

「し、真精霊様!? 申し訳ありません。僕はバックと言います。そちらのかたも共にそちらの少年を苛めているように見えてしまいました。」出てきたのは猫見たいな精霊。やたら謝っていてドラゴンも動揺している。俺はそんな二人を放って、銀髪の女の子に近付く。

「先程は紛らわしくて済みません。殺気をほんの少し放って申し訳ありません、ドラゴンが怖くて済みません。」

「最後の一言は余計だよ!!」ドラゴンの鋭い突っ込みが決まった。すると女の子はフツツと笑った。お互い名乗ったとき

「んっー!!」存在を忘れていた、先程苛めていた少年が唸る。まずそんなケガでもないけど放っておけないから精霊術を使って傷を治す。そして、目覚めた少年、スバルに挨拶した、女の子もといエミリアにさようなら、と言ったあとドラゴンに乗って帰った。そして、ドラゴンの背中はどうしようもなく眠くなって寝た。

スラムの盗品蔵で血だらけで死んでいる大男、血に伏せるエミリアに腹を抑えて苦しむスバル。それを見て笑う黒髪の女、

気持ち悪い夢を見て起きる。俺はもうドラゴンの背中から降りていた。これが予知夢だろうか。だとしたら不味い。不意に辺りを見渡すがさつきと同じ光景。夕方だったのに昼になっている。

「チカ相当疲れているね。」さつきと同じドラゴンのセリフ。まるで時間が戻ったみたいだ。確かめようと思つて路地裏にいくと、スバルが苛

められていた。その後、エミリアが来た。明らかにさつきと同じだ。「君ってスバルっていう名前ですよ。俺達一回会ってますよね。」それからスバルと情報交換をした。自分達が先へ進むために必要なことを確認した。

「つまり自分はエルザという女性にエミリアさんの徽章を守れば良いわけですね。」

「ああ。そうだ。」

幸い、時間はまだあるし、今日は非番だ。口笛を吹くと一羽の鴉が飛んできた。羊皮紙の手帳を一枚破って、

「人助けをするので帰りが遅くなります。　チカゲ」と書く。鴉がそれをくわえて飛んでいった。

「転生特典もちは良いですね。というか文字ってどうやって身につけた？」鴉をみたスバルが皮肉混じりにいったあとおれに訪ねてくる。

「俺の主人様に習いました。6時間で身に付けましたよ。」クルシユ様の教え方は真戸さんっぽくてなんか懐かしかった。

「取り敢えず行きましょう。まずはエルザより先に盗品蔵へ向かいましょう。」スバルにそう言う。スバルは元氣よく返事をした。

「下がっている。」盗品蔵は鋭い空気が漂う。ドランの営業時間も終わった今、戦うなら赫子を出すしかない。ただ今は最高に腹が減っている。昨日、赫子を使ったこともあって多分赫子を出したら100%暴走するだろう。この世界は有馬さんや真戸さん。平子さんに倉もっさん、排世もいないから俺の暴走を止めてくれる人はいないだろう。扉がギイツつと軋みながら開く。

「下がっているなんて心外ね。」扉を開けて入ってきたのはエミリアだった。安心すつスバルだったが、

「下がれ!!」おれは黒い影が飛んで来るのが見えて叫ぶ。

「あら、なかなか鋭い人もいるじゃない。」黒髪の女、コイツがエルザだろう。

「あなたの腸も欲しいわね。」そう言いながらエルザは攻撃してくる。エルザは剣を振り回すがそれを全て避ける。

「あばた、相当強いわねえ。益々欲しくなっちゃうわ。」ニタリ、と笑って攻撃してくる。クインケは置いてきてしまった。武器が無い今、赫子を使うしか無いだろう。エルザの剣をわざと手で受けて手を切り落とした。切り落とした手に喰らい付く。グロテスクな光景に顔をしかめるエミリアとスバルだった全部食べ終えてスバルに言う。

「スバル、悪いですね。俺は隠し事をしてました。」甲赫と羽赫を出す。「俺は喰種です。」

「えっ」スバルの思考が停止する。自分の死に戻りを理解してくれる千景が、あんなに冷たくても優しさがあつた千景が、人を喰らう怪物だったという事実には。

「あなたは怪物よね。」エルザは喰った筈の片手がもう再生していにとに気付く。

「余所見は止めた方がいいですよ。」エルザはその声を聞き取った瞬間、もう切られていた。それから足、腕、胴、色々な部分が切られている。エルザがよろめいたら隙に羽赫を撃ち込む。尋常じゃばいパワーにエルザは後ろへ吹き飛ぶ。その時扉が開く音が聞こえた。

「大丈夫か!？」声の主は昼間に会った騎士、ラインハルトだ。でもラインハルトは異様な光景に驚く。不思議な器官を体から出す千景に腹にデカイ結晶の様な物を撃ち込まれたエルザ。死にかけているエルザを千景はまるで別人のような、睨まれるだけで動けなくなりそうな冷たい眼で見ている。

「ラインハルトさん。こんにちは。」硬直している状態のラインハルトに挨拶をするとラインハルトは数秒間黙ってから慌てた様子で挨拶を返した。

「これは君がやったのかい？」ラインハルトは怪訝そうに訪ねてくる。「はい。そうですけど。駄目でしたか？この際、襲ってきたのは彼女だし、襲ってきた理由も彼女が欲しがっていた盗品の受け取りを阻止した俺達に対する八つ当たりでしたので正当防衛の範疇ですよね。」

「ああ。悪い訳ではないんだ。この人は巷で腸狩りと呼ばれていた殺人者だね。相当な手練れだったんだけど、この人を君一人で倒したんだったら凄い話だ。君は近衛騎士団に入るつもりはないか？」急な勧

誘に驚きつつ拒否。

「俺は自分を助けたクルシユ様の近くに居たいですのでその勧誘は拒否させていただきます。今は執事としての仕事を、」

「ああ!!君がフェリスの言っていた!?!料理が美味しいと言うことと、とても強いという事はフェリスから聞いていたよ。別に騎士団に入ったらクルシユ様の執事の仕事が減ると言うわけでも無いしクルシユ陣営から離れる訳でもないんだ。騎士は一人だけと言うルールも無いし、君みたいな強い人には騎士団に入って貰いたいほどだよ。フェリスも君に騎士団に入って欲しいがっていたよ。」一世一代の出世のチャンス。しかもフェリスとラインハルトの推薦が有るんだっ
たら確定だ。

「分かりました。俺の推薦、お願いします。」

それから推薦が承認されて騎士団入りを果たすのであった。

化物だって心はある。嬉しいことを言われたら嬉しい。

薄暗い部屋の中一人の男が跪いている。男の前にいるのは女性だ。やがて女性は赤い液体が入った瓶を差し出す。

「有難う御座います。クルシユ様。」跪いたままでクルシユ様に礼を言う。

「気にするな。お前も生きる為なんだろう。それと今は二人きりだ。何時ものように呼んでくれ。跪かなくても良い」

「分かりました。クルシユ。」クルシユは呼び捨てで呼ばれた名前に顔を赤める。つい先日、自分もフェリスの様に呼び捨てで呼んで欲しい。と懇願されたのだ。ここまでいくといくら鈍感な俺でも、いくら素直に慣れない彼女でも自分の気持ちを理解していた。二人とも相思相愛だった。

「チカゲ。最近何でそんなに焦っているんだ？相当息詰まっているよに見えるが。」流石クルシユの観察眼だ。俺が焦っていることもお見通しだった。自分の選択で誰かが悲しまないように、自分の選択で誰かが死んでしまわないように、自分の選択でクルシユが泣かないように。そう考えると、どんどんどんどんどんどん苦しくなっていく。自由に生きれなくなつて、今では寝るのが怖い。だから寝れない。そのお陰で怪我も多くなつた。寝れなくて頭が痛い。肉体にガタが来ている。

「大丈夫です。おきになさらずに。」クルシユにそう言うが未だに心配そうな顔をしていた。

クルシユにぎこちない微笑を向けるがクルシユの心配そうな顔は益々深まるばかりだった。同時刻、同じ症状に陥っている少年が居たのは別の話である。

「ご馳走さま！」フェリスの声が響いてから皿が厨房へ運ばれる。運

ばれた皿食器や調理器具を直ぐに洗うが、包丁で誤って手を切ってしまう。直ぐに手は治るが自分の精神がぐちゃぐちゃなことを思い知る。それから花瓶を割りかけたり（割ってはいない）自分の選択は間違っていないか。考えるのは何時でもそれだけで他の所に目がない。この状況で死んでリセットできるスバルを心底羨ましく思う。自分も死んでリセット出来たら、もし選択を間違っても一つ前からやり直せたら、そんなことを考えているとフェリスが話し掛けてきた。

「ああっ。チカちゃん!!」

「こんにちは、フェリス。」たたた、とフェリスは走って駆け寄ってくる。

「うわっ!!どうしたのー!!顔色悪いよ!」多分今の俺は酷い顔をしているだろう。

「おきになさらずに。」多分言っても伝わらない。いや言えない。俺がクルシユに未来選択を言おうとしたら急に心臓が痛くなって、軽く吐血した。一瞬心臓を潰されたのかと思った。フェリスは何か考えながら去っていった。その後廊下に「そうだ!!!」と言うフェリスの声が廊下中に響き渡った。

声にならない叫びをあげた。ここは風呂場。さつき女子用（クルシユ様のみ、フェリスは含まない）の時間が終わって男性用の時間になった。ヴィルヘイムとフェリスは先に入ったようでは俺一人だ。前まで癒しだった風呂も癒しにならない。本当に息が詰まりそう。湯船から出て体を洗う。しかし大きい浴場だ。大衆浴場って言うても良いぐらいだ。5人しか居ないのに何故にこんなに大きいんだろうか。浴場全体を見渡していたら扉が開く音が聞こえる。フェリスだろうか。後ろを振り向くと。

「いたいた!!チカちゃん!!」

「こんばんわ。チカゲ」

上からフェリス。そしてクルシユである。え、女子の時間帯だったっけ?!浴場の床に置いていた洗面器に手を伸ばして懐中時計を

引っ張り出してみる、が男子の時間帯だ。焦っている俺のようすを見てフェリスは腹を抱えて笑っている。

「ととと!!と、取り合えず上がりますっっ!!!」急いで上がろうとするがフェリスに腕を掴まれる。

「だーめ。上がるのは許しません。三人で入ろうよ。ネ?」フェリスの絶対逃がさないっていう目に負けて三人で入ることにした。

「俺は何をすれば良いのです?」フェリスに聞くと

「居ればいいの。ちよつと笑ってくれると更に良いかもヨ。」と言う不思議な回答が来た。フェリスとこそ話しているとクルシユが口を開いた。

「殿方の裸をみたのはチカゲが二番目だなフェリスを数えないとする
と初めてだ。それにしても意外と筋肉質何だな。飾りとしての筋肉
出はなくて本当に必要な筋肉が絞り出されて付いているという感じ
か。」

「そうでしょうか?」改めて自分の体を見る。肋が少し見えていたり
する辺りまだガリガリだと思いが。するといきなりフェリスが

「アー。ノボセタカラアガルワ。フタリでゴユツクリ。」いや!!バレバ
レだよ!!クルシユ様は嘘がわかるんでしょ!!クルシユの方を向くと

「はえ!!ふつ、二人きり!!」駄目だこりゃ!!フェリスは舌をピロツと出
すと俺の方を向いてガツツポーズをしながら、

「頑張つて!クルシユ様の気持ちを無下にしたら許さないからねえ
〜」と言って風呂場から出ていった。

「クルシユ。大丈夫ですか?」顔が真っ赤のクルシユに言う。いま
は二人きりだ。

「だ、大丈夫だ。問題ない。」クルシユは更に顔を赤くして言った。俺
は覚悟を決めた。そしてクルシユの目を見て言う。

「クルシユ様、いえ、クルシユ。俺は貴女が好きです。愛しています。」
「俺は人しか食べられない化物です。この手は夥しい量の人間と同種
の血で汚れていて奪うしかできない化物です。でも、こんな俺とで
も、こんな救いようのない俺とでも一緒にいてほしいです。俺は不器
用だ。無愛想だ。常に無表情です。でも!!それでも、、!!」クルシユ

の目を見て真剣に言う。クルシユは俺の様子を見てそれに応えるようにクルシユは俺の手を取り言う

「大丈夫だ。チカゲの手は汚れてなんかいない。」

さらにクルシユは取った俺の手を握って言う。

「私はチカゲの不器用さが好きだ。料理も上手だし、掃除も誰よりも綺麗に出来るのに不器用なチカゲが可愛くて好きだ。」

「チカゲは無表情だからこそたまに見せる表情の変化、何れもが新鮮だ。いつものその顔も好きだ。必死になっているときの顔は凛々しくて好きだ。怒った顔は正直冷たくて怖いけど、そんな顔も出来るんだ、と思えるから好きだ。たまに見せる微笑も胸が苦しくなるほど好きだ。でも一番好きなのは滅多に見せない。チカゲが心の底から笑ったときの顔だ。無邪気に、何処か淋しそうに笑うその顔が大好きだ。」

「チカゲが人を喰らう化物だからとかそんなことは私にとってはどうでもいい。チカゲが自分は奪うしかできない、と思っっているんだっから大間違いだ。私に恋心というものを既に与えてくれていたではないか。私にチカゲを嫌いになる理由なんてない。私はチカゲを愛している。私のそばにずっと居てくれ。隣で私を守ってくれ。」そう言ってクルシユは抱きついた。それに応えるように、俺も腕をクルシユの腰に回す。暫くの間抱きついていとあることに気が付く。裸だ。いい雰囲気だったのに裸だということに気が付いて二人とも顔を赤くする。そうして二人で笑いあった。少年のように、無邪気にずっとずっと笑いあった。

その夜、葉巻をくわえながら自作赫子銃弾を作る。この世界の金属は適度に固い癖に加工がしやすい。銃弾をつくるには持ってこいだ。対物ライフル用の弾とリボルバー用の弾を作る。Qバレットだ。本来はSレート喰種を相手にする0番隊にとって必要のないものだがこの銃弾がその常識を覆した。薄暗い部屋の中でコツコツと作っていく。途中途中コーヒーを飲んだり、煙を吸ったり、、、二時間程で500発ずつ出来上がり、必要な分はケースに入れて白いロングコート

に入れる。作業に疲れて伸びをしながら夜空を見る。夜空には乙女が浮かんでいる。そしてベッドに入ると疲れてすぐ眠った。今日の朝にあれほど悩んでいたことも今となってはすっかり忘れていた。

暴走

「はあ、はあ」昨日は良いことが有った。クルシユに想いを伝えられた。クルシユは想いを受け取ってくれた。なのに、なのに!!!背中がグツシヨリと汗で濡れている。思い出すのは今朝見てしまった予知夢。予知夢の中でクルシユは片手が飛ばされて記憶が無くなった。何がなんでもクルシユは失わない。この未来を変える方法、それは簡単だ。クルシユの腕を切り飛ばした男達を殺せばいい。今日殺しに行こう。引き出しからコルトガバメントとブラックホークを取り出し赫子銃弾を2つの銃に入れる。ariaにもマガジンに馬鹿デカイ銃弾を入れ込む。横長のアタツシユケースを開けると武骨な鞘に入った長い刀が出てくる。異常がないか点検したあと全てをベッドの上に置いてシャワールームに入って汗を流す。今日は非番だ。1日で終わらせてやる。覚悟を決めてクルシユの部屋に外出する事を伝えるに行った。

それにしても魔女教が何故?頭の中では

「魔女教大罪司教『強欲』担当、レグルス・コルニアス」

「魔女教大罪司教『暴食』担当、ライ・バテンカイトス」

と言う二人の自己紹介がぐるぐる回っていた。

早朝の街、いつもの様な五月蠅さは無い。白いロングコート、零番隊のコートに身を包む。向かうは近衛騎士団本部。無知で捜すのは埒が明かない。魔女教については知っているが現れる場所等は知らない。

近衛騎士団本部についたあと魔女教についての資料を漁る。まだ来ている人は居ない。暗い部屋で資料を見る。粗方見たけれど解ったことは存在が謎と言うことだ。今まで目撃されているエリアは何れもバラバラだ。地図に現れた場所に×印を書いていく。最後の部分を書き終える。地図と睨み合っていたら扉が開く。

「チカゲか。早いんだなというか此処にいるのは珍しいな。何をしているんだい?」入ってきたのはラインハルトだった。

「ラインハルトですか。今日は仕事がないので。あとしなければいけないことがあってその情報を確かめるために此処に来ました。」

「しなければいけないことって、って答えてくれないよな？」特に隠す理由も無いし話そう。

「魔女教を殺してきます。」放たれた爆弾発言でラインハルトは一回固まる。

「魔女教は犯罪集団なので殺しても問題無いですよね？俺としてもクルシユ様を助けたいので？」

「別に問題は無いが、聞こう。それはクルシユ様の為なのか？」ラインハルトが真っ直ぐ俺を見る。

「いえ。違いますよ。自分の、俺の為ですよ。俺はクルシユ様の側に居たい。クルシユ様を守っていたいから此れをやるんです。ね。自分の為でしょうか？此れをクルシユ様の為と言うのは些か傲慢、じゃないでしょうか？」それを聞いてラインハルトは呆れた様に息をはく。

「止めてもどうせ行くんだろう？最近リーファス街道の近くの森林で不審な事故が沢山起きています。そこに行ってみると良いかも知れない。気を付けて。死ぬなよ。」

「そう簡単に死ぬつもりは無いし、そう簡単に死ぬる体でもありませんから。」クインケを2つ持つ。ちょうどドラランが起きたよう何をするつもりかは得意のプライバシー侵害で分かっていた。本部を出てから人目の無いところでドラランは出てきて、出てきたドラランに跨がる。

「場所はリーファス街道でしょ。飛ばすよ!!」クインケを確りと握りしめた。

「魔女教との対決、俺も手伝うよ。」

「いつも思うんですが、何故、ドラランは俺を手伝ってくれんですか？」と言うかそもそも何故俺と契約したのかが知りたいところだ。

「主人の困難は従者の困難、主人の敵は従者の敵、でしょ？それと何故契約したか、ねえ、、、チカゲといると楽しそうだから。凄い面白い奴いるわー、って最初思ったから、かな。実際今も結構ブツ飛んだことしようとしているでしょ？チカゲは最高に面白い奴だよ。」ハハハと

ドランは笑う。

「それは誉め言葉、でしょうか？」

「どうだろうねー。」そうこうしているうちに巨大な木が見えた。リーファス街道に着いた。ドランを宝石に帰してリーファス街道を歩くと、、、

「凄い寵愛受けているんね。まさか君が傲慢じゃない。それもあり得る？君は魔女教徒？」目の前には矢鱈陽気な男が居る。

「そう言う貴方は魔女教大罪司教『強欲』担当、レグルス・コルニアスですか？若しくは『暴食』担当、ライ・バテンカイトスでしょうか？」変な雰囲気の人に白幻を突きつけて聞いた。魔女教徒は確定だ。でも気になるのは目の動きだ。さつきからチラチラ後ろを見ている。

「僕は質問した。質問したじゃない。されたら答えるじゃない。そう言うものじゃない。それに答えないで武器を突きつけて別の質問を重ねてくる。ああ、自由さ。それは君の自由だとも。君からすれば僕は勝手に喋って、勝手に武器突き付けられて、勝手に質問されて、勝手に質問して、無視されている風に見えるわけだ。いいよ。そうしなよ。でもさ、その考えってつまりこう言うことだよね？」前のめりになりながら首を傾げて眼力を強くして言う。

「それは僕の権利をー数少ない私産を、蔑ろにするってことだよねえ？」

「さあな。」そう答えてレグルスから距離をとり白幻を投擲するが白幻は男に当たると割れた。

どうやら厄介な能力が有るらしい。白幻は問題無いだろう。説明していなかった白幻の3つのギミックの内の一つ、超回復だ。この刀はまるで喰種の身体の様に分れたら再生して、しかも強化されていくのだ。とまあギミック紹介は措いという、未だにレグルスは後ろをチラチラ見ている。俺になんか負けない、という余裕も表れか、はたまた後ろに大事ななにかが有るのか。一回レグルスに高速で接近して殴ってみた。するとまるで予知夢のあの瞬間の様に右腕が飛んで

いった。それを見てレグルスは面白そうに笑うが、それも束の間、中に浮いた腕は直ぐに再生した。それから手を飛ばされて、再生して、、、それが数え切れない程続いた。

「時間停止。僕の触れたものを無敵にすると同時に最強の武器にする権能。ただこの権能は自分の心臓も止めちゃうから一つだけだったら使えない。そこでもう一つの権能。小さな王。この力で他人に自分の心臓を重ねて欠点をカバーした。君に勝ち目はないんだよ。」レグルスは余裕で言う。あれほど動いたのに息を切らしていないということは並大抵の体力では無いだろう。するとレグルスは地面の砂を高速で飛ばした。飛ばされた砂を体で傾けて避ける。幸いにも何も無い平原だから壊れる物もない。ただ一つ分かった。

「だからですかあ。だからさつきから後ろをチラチラ見ているんですか。後ろをチラチラ見るのは余裕の表れじゃなくて大事な物があつたんですね。」レグルスは俺が気付いたことに焦って砂で攻撃してくる。

「無理ですよ。貴方の威力では俺を殺せませんよ？再生が追い付いてしまう。」レグルスは殴って首を飛ばすが、それすら回復する。

「ドラン。出て来て下さい。」宝石からドランが出て来た。

「ドラン、貴方の能力は何ですか？」

「んー。得意、不得意有るけど殆ど何でも出来るよ。」

「ではかなり無理を言いますが、この世界中の生物、自分とドランとこの男以外を一時的に仮死状態にして目覚めさせることは出来ますか？時間を止められると尚良いです。」この世界中の誰かにレグルスの心臓を重ねている訳だから一時的に仮死状態にしてしまえばその重ねている人も機能しなくなるわけだ。安心してこいつを殺せる。

「出来るよー。じゃあ始めるよ。」これで世界中の生物全てが仮死状態になった。レグルスは自分の心臓が止まる。レグルスの動きを封じた今、足と手を切り落とす。時間停止を解いて逃げようとするレグルスだったが自分の足と手が無いことに気づく。レグルスの前に立つて鱗赫をだす。

「遺言は有りますか？俺は優しくてねえ、遺言は聞くことにしている

んですよお。」ちよつと暴走気味だ。人肉を喰ってないから、血しか飲んでないから。頭が痛い!!!何かを言おうとしてレグルスは口を開ける。が、

「はい。時間切れですねえ。時間は限られているんです。その時間をいくらでも使おうなんて考え、傲慢じゃないですかあああ。」首を鱗赫で撥ね飛ばす。久しぶりの人肉にかぶり付く。

「チカゲ、正気に戻って!!」ドラランが珍しく焦って言う。

「なに。言ってるんですかあ?正気ですよお。」目の前のレグルスの死体に噛みつく。ムシヤムシヤ、嫌グシヤグシヤという咀嚼音だけが何もない平原に響く。暫く食べ続けた。レグルスを食べ終わるとハアハア、と息を切らす。目の前の光景を見て思う。やってしまった。

「ドララン。ごめんなさい。ちよつと暴走したようです。」ドラランは無言で此方を見る。

「本当にごめんなさい。言い訳ですが此処に来てから血しか飲んでいませんでした。」やつとドラランは口を開く。

「無理、してただね。」いつものドラランとは考えられない程、穏やかに諭すように言う。

「でも、君は人しか食べられない。誰かを殺すわけにはいかないし、クルシユ様達を食べるわけにもいかない。何とかしてあげたいけど僕にはなにも出来ないんだ。」そう。ドラランにも、クルシユ様にも、フェリスにも、ヴィルヘイムにも、俺にも、何も出来ない。前と同じ様に皆と同じになりたい、そう思うが叶わない願いだ。生まれながらだ。生まれながらの、この呪いを嫌いながらも生きてくしか無いんだ。俺はただひたすら耐えるしか無いんだ。声にも成らない叫びが体の中でずつと木霊していた。

執事兼騎士

レグルスと戦ってから2日が経過した。レグルスを食い漁ったお陰で少しは楽になった。クルシユ様と俺は進展無し。そもそも付き合っているのか？他の人が見たらそう言うだろう。多分俺達は付き合っているのだろう。これって自意識過剰?!

そう言えば俺の中で一つ決めたことがあった。俺の空腹についての問題だ。初めクルシユ様にこれを相談したところクルシユ様が、自分の肉を食べさせて傷はフェリスが治療すると言うのはどうだろう、、、いや傷なんて治す必要は無い!!って感じの事を言われたが流石にそれは申し訳ないし、クルシユ様の身体に傷は付けたくないと言うことで却下させてもらった。結局はレグルス等の魔女教徒やその他の犯罪者、まあ生きる価値の無い奴を喰うと言うことで決定。今まで通り定期的に血は頂くと言うことだ。

近況報告はこの辺にしといて、今日は大切な日だ。俺のクルシユ様の執事兼騎士が承認される日なのだ。それに加えクルシユ様の王選絡みのことも、、、だから何時もより頭髪や服装を綺麗にする。常時着ている執事服ではなく近衛騎士団の制服に身を包む。滅多に着ない服だから違和感が凄いいけど。あと、近況報告で言い忘れたことが!!今の悩み何だが、白幻のアタツシユケースが破損。実は白幻のアタツシユケースはただのケースで、白幻自体に鞆はついていてからケースは無くても大丈夫何だが、日本では刀なんて腰に差して歩いていたらただのキチガイだ。直ぐに職質される。だからケースをつけていたんだが必要無いか？まあケースが無い今、腰に差す他無いから無地も白い帯を腰に巻いて白幻を差す。逸その事、短めの黒現を脇差として差そうと言うことで<aria>のケースを開けると太刀より少し長い、白幻の3/2位の長さの真っ黒い武器が出てきた。銃剣としても使えるが持って切るのが本来の使い方だ。此方も鞆があるので態々アタツシユケースに入れる必要は無い。黒現を白幻の上に重ねる様に差すことにした。そうしていると扉が勢いよく開いた。

「チカゲ殿。時間です。」時間を告げに来たヴェルヘイムに返事をす

る。必要は多分、いや絶対無いが、白幻と黒現を腰に、リボルバーとハンドガンを胸元に入れて竜車に乗り込んだ。

会場に行ったらラインハルトとスバル、エミリア、それとユリウスと会った。エミリアやスバルは元気になっているようだ。そして王選が始まった。そしてクルシユ様の所信表明が始まった。

「準備はいいかい？」ラインハルトがこそりと聞いてくる。それに対し頷きで返す。会場にマーコフの声が響いた。

「ではまずクルシユ様から、クルシユ様は所信表明の後、新しい騎士候補の承認が有りますので下がらずに。騎士フェリックス・アーガイル！ここに。」

「うむ。」

「はい。」

フェリスとクルシユ様が前にでて話しているのを見る。途中、クルシユ様から宜しく無い発言が有りざわついたが。それに俺の番になった。またもやマーコフの声が響く。

「騎士候補、チカゲ・シワス！ここに。」

「はい。」軽く一礼をして前に出る。スバルがあからさまに驚いているのが見える。

「この者の承認をとる。異論のある者は挙手を。」マーコフがそう言う。と陰険な男が手を挙げた。

「同じ人物に騎士は二人もいるのかね？」答えようとする。フェリスが此方をみてアイコンタクトを取って口を開く。

「フェリちゃんは、回復とかは得意にやんだけど、戦闘が苦手でネー。その点チカちゃんはとっても強いから問題無し。そもそも騎士は主人を守るものにやんだから、この場合主人を完璧に守れているヨ。」フェリスに論破された男は渋々手を下げた。

「では承認をとる。賛成するものは挙手を。」全員の手が挙がった。

「では、チカゲ・シワスはクルシユ様の騎士であることを承認する!!」有難う御座います、と一礼した後賢人会の席を向く。いて挨拶をする。「賢人会の皆様、騎士と成りましたチカゲ・シワスです。」また一礼を

する。立っているクルシユ様の前に行き、苦笑混じりの微笑を浮かべた後跪く。

「貴女に忠誠を誓う。いつまでも貴女の元に」クルシユは顔を紅くしたあと、直って良いぞ、という声が聞こえたので直る。そしてクルシユの後ろにいるフェリスの横に並んだ。

それから無事？（スバルが途中で騎士宣言をして追い出されたり、）な王選が進んだ。そして今、闘技場へと来ている。目的はスバルvsユリウスの観戦だ。フェリスが審判をしている。予想通り、面白いくらいボコボコにされている。やがてスバルは気を失う。見終わって帰ろうとしている俺にユリウスが声を掛けた。

「チカゲ、君は僕の尊敬する友であるラインハルトが尊敬する程強いらしいな。折角闘技場へ来たんだ。手合わせ、しないか？無論、手加減無しで。」唐突な誘いだだが、正直やりたい。強い人と戦うのは楽しい。

「良いですよ、ただ木刀では本気が出せません。なので僕は此でいきますが良いですか？」鞘つきの白幻と黒現を持つ。

「良いだろう。フェリス、審判、頼めるか？」

「良いよー。」お互い、円形の闘技場で向かい合って立つ。フェリスがその間に入るとユリウスと俺とアイコンタクトを取る。

「それじゃあ、開始だヨー！」

正眼の構えで白幻を構えたあと、同じく構えているユリウスを見据える。先手を打ったのはユリウスだ。ユリウスの激しい攻撃をかわしたり受けたりして防ぐ。ヴェルヘイムときは分析出来たが、ユリウスの場合分析している暇は無さそうだ。今のところ剣が休まったことは無い。未だに続いている連撃を終わらすためにわざと強く受けて、衝撃をユリウスへと返す。衝撃を食らったユリウスは仰け反るが無理矢理構え直した。千景も正眼の構えへと構え直して不安定なユリウスの木刀の先端を切先で弾き、がら空きの腹に一回、さらに出来た隙を使い袈裟斬り、逆袈裟斬りと攻撃を重ねる。最後に上段の構えで、心の中で面!!と叫びながら頭へ振り降ろした。硬い鞘を頭から

食らったユリウスは気絶した。フェリスは予想通りと言った顔で、クルシユ様も予想通りなようで苦笑を浮かべながら此方を見る。目の前で気絶しているユリウスに美女じゃなくて御免なさいと謝りながらも担いで看病(?) することにした。

ベッドで寝ていたユリウスは目覚める。

「チカゲが看病してくれていたのか。済まない。」深々と頭を下げたユリウスに対して少し焦りながら自分も謝る。

「いえ、気絶させてしまったのは俺なので謝るのも俺の方です。申し訳ありませんでした。お互い謝ったということで手打ちにしましょう。」

「ああ、そうだね。チカゲは強いんだな。多分、ラインハルトと互角いや、それ以上だね。」そう言うユリウスにお礼を言う。

「光栄です。ただ俺はまだまだですね。今日は有難う御座いました。久々に楽しかったですよ。」

「ああ。此方こそ。チカゲは珍しいタイプだね。誉められたことではないが近衛騎士団は剣ん一腕とプライドの高さは折り紙付きなんだ。チカゲのように人に頭を下げられるひとは余り居ない。」少し意外だ。「そうなんですか? ユリウスさんやラインハルトさん、フェリスは人に頭を下げることなどは出来ていると思いますが。」そう言うユリウスは少し笑った。

「そう言えば、お身体は大丈夫でしょうか。」

「ああ、問題ないよ。」自分の体を動かしながらユリウスはそう返事をした。

「それでは大変申し訳ありませんが予定が有りますので失礼します。また会いましょう。」

「ああ。またな。」礼をして部屋から出た。先程クルシユ様から聞いたが、今日からスバルが治療の為に泊まるようだ。客人をもてなす準備をしなければ。朝、乗ってきた竜車に乗る。するとドラランが話しかけてきた。

「そう言えばチカゲ、君凄い変な属性の魔法使えるんだね?」

「、、?」

「？」

「にやんの属性？」俺に続きフェリスとクルシユ様も耳を傾ける。

「チカゲが使える属性は無属性だよ。」は？無属性？

「それって全属性使えるってこと？」フェリスが聞くが、ドランは首を横に振った。

「どの属性でもないってことだよ。言っちゃえばマナが必要なとんでもない能力。いまからその能力を言うから。えーと、肉体変化、物体操作、重力操作、衝撃操作、時空操作、時間操作、生体操作、空中移動、顕現、だよ。細かい説明はあとで。」何て反応していいか分からない。フェリスとクルシユ様も同様だ。

「それってどうなのですか？」

「こんな属性見たことないや。やつぱチカゲといると退屈しないね。純粹に強いと思うよ。あー、そう言えば僕も能力を使えるようになったんだよ。竜車に一人分の空きはある？」確認する。ちようどあと一人座れる。

「はい。」

「それじゃあいくよー。胸の宝石から粒子が出てきて空席にそれが集まる。やがて人の形になった後、光った。」眩しさに目を閉じる。閉じた目を開くとそこには灰色の髪的美少女が座っていた。

「どう？僕の能力。スペース削減でしょ？」ていうかドラんって女だったんだ。

「ドラんって女だったのですね。」

「え？知らなかったの？」まさかの僕っ娘。真精霊は女だったか！

「ドラんちゃん可愛い!!」

「でしょでしょー？」フェリスがドラんに抱き付く。っていうかいつの間に仲良くなったんだよ!?

「まあ。これからはこの格好でいることが多くなると思うからー。改めて宜しくねー。」

「あ。はい。宜しくお願いします。」未だに驚きが抜けきらねえ。それは邸に着くまで続くのであった。

客人

相手は知り合いであるが同時に客人だ。確り礼儀を持って接しなければ。そう考えながら黒い無地のネクタイを締める。取り敢えず料理を作ろうと厨房に向かった。

「うめえ。家のレムりんにも負けねえくらいだ、」好評ならなによりだ。厨房から出ていってクルシユ様の斜め後ろに立つ。

「この料理を作ったのは彼だ。彼は私の執事だ」クルシユ様が紹介すると同時に一礼をする。

「紹介預かりました。シワス・チカゲと申します。短い期間で御座いますが宜しくお願いします。何かあれば私に」もてなしモードで一人称が変わっていることはこの際措いておいて欲しい。

「そう畏まるなって。チカゲ」砕けた感じで笑いかけてくるスバルに酷くぎこちない笑みを返す。

「分かりましたよ。スバル」何時もの調子に戻る。

「一応スバルは客人扱いです。なので何か在れば俺に言って下さい。可能な限り聞きましよう」スバルはおう、と快く返事をした。クルシユ様に下がって良い、を言われたので下がると同時に全員の空いた皿を片付ける。

厨房で皿を洗っていると青髪の女の子が入ってきた。

「食器を洗うの手伝いますよ。」

「お客様に食器を洗わせるなんて出来ませんね。貴女がレムリンさんですか？」そう訪ねると物凄く冷ややかに、レムです。リンは要りません。と言われた。チカゲのガラスの心に10000ダメージ。チカゲはひんしになった。とはならず好奇心が勝ってレムさんに食器を数枚洗ってもらうことにした。実際一人じゃ捌ききれないかもしれないなかったし、この子、謂わば他のメイドの働き振りとはどの様なものだろうかと気になったためだ。自分も洗いつつ横を見ると凄く手際良く、汚れ一つなく洗っていた。

今日の俺の仕事は全て終了して、あとはヴィルヘルムさんにバトンタッチ。ここまで上手く行っている。初めて客人が来るわけだから見知った仲とはいえ緊張はあった。が上手くいき過ぎて正直怖い程だ。スバルに到っては特に何も無し。ただあの青髪の女の子。初めて会った時からずっと俺をチラチラみている。わざと目を合わせるど焦っている面白かったが、あの女の子が俺に向けているのは殺意であり、同時に何かを試しているようだ。監視の目、そうともいえる。どちらにせよ、俺があの子に向けている感情、視線は友好的なものではないのは確かだ。もしかしたら俺が人を喰らう化物だと言うことに気付いたのか？一人で笑みを浮かべると外から賑やかな声と木刀がぶつかり合う音が聞こえてきた。

音は何かと外に出てみるとスバルとヴィルヘルムさんが闘っていた。多分、稽古をつけてもらっているんだろう。こうして見ると自分まで参戦したくなる。

「こんにちは。スバルにヴィルヘルムさん。ですか」

「俺には様がねえのかよ!!客人だぞ!!」

「スバルは本当に騒がしいですね」一応反応しておいて近くに腰かけた。しばらく見ているとヴィルヘルムさんが声を掛けてきた。

「チカゲ殿も参加しませんか？」望むところだ。上着を脱いでネクタイを緩めた。

「そうさせていただけます」木刀をヴィルヘルムさんから受け取るとスバルの前に立った。

「何処からでもどうぞ?」

スバルが走ってきた。ユリウスとの模擬戦と比べて上達はしているが未々詰めが甘い。

「もつと構えを楽に」スバルの剣を防ぎつつアドバイスをする。

「力みすぎずに」

「確実に狙って」

「大きく踏み込んで」ちょっと衝撃を返し過ぎたかも知れない。スバルがいきなりの衝撃に動揺して俺から目を反らした。

「敵から目をそらすなっ!!」スバルの木刀を飛ばした。

「ユリウスとの模擬戦と比べると良くはなっていますが、まだ10点程ですね。確り練習してください」

「随分と辛口だな。何点中の10点だ？」

「1000点です」当然である。スバルの剣技はまるで下手な踊りの様でもあった。スーツの胸ポケットから煙草を取り出して火を着けた。

「お前って煙草吸うんだな。俺にも一本くれよ」木刀をヴィルヘルムさんに渡して立ち去る。

「未成年の喫煙は禁止されてますよ」

スバルとの稽古を終え、向かった先はクルシユ様の部屋だった。

「こんにちは。クルシユ」部屋に入ってソファーに腰掛けた。

「これ、今日の分の血だ」綺麗な赤色だ。多分相当健康に気を使っているのだろう。そう言えば疑問が有ったのだった。

「クルシユは俺が人を喰らう化物だ、って言ったとき驚きませんでしたよね」正直、俺が人間だとして、目の前にお前らを喰う化物ですよ、って表れたなら色々な事を思うだろう。

「そうだな」

「何故ですか？」クルシユに聞いてみると暫く考えた。そして俺を一瞥した後言った。

「そもそも、この世界には魔獣くらいしか人間を襲う者はいないからあまりイメージ出来なかつたって言うのが一つ」

「それと、、、」

「それと？」

「チカゲがとても綺麗だったから。人間と同じ容姿をしていて人間より綺麗だった」面と向かって言われると少し照れ臭くなる。でも俺が美しくたつて人を喰らう化物なのには変わりない。

「それだけの事で、、、」

「私にとってはそれほどのことだった」

「お前が人を喰らう化物だろうが、優しい人だと言うことは分かった。愛してるぞ」顔を真っ赤にして部屋を出た。

部屋から出て廊下を歩いているとスバルとレムの話す声が聞こえた。

「あの方、チカゲさんでしたっけ」どうやら俺についての話だろう。黙ってスルーするのがマナーだろう。立ち去ろうとしたが気掛かりなフレーズ聞こえてきた。

「スバル君より匂います」

「匂うって魔女の匂いか？」

「でも俺を信じてくれ。アイツは芯の通った奴だ。どっちかと言えば魔女教に加担する方ではなく、敵対する方だ。頼む、信じてやってくれ」

「スバル君が言うならそうします」

無言でその場を立ち去った。